

一三、爆彈事件、新大學創立

この時（一八九二年）エリゼ・ルクリュはブリュッセルの自由大學に地理學講座を受持つべく招聘された。その時彼は極めて平靜に、パリ郊外のブル・ラ・レインに住居していたが、この招聘を受けて喜んだ。稀有の碩學に對してそれは當然のことでありながら、彼はこれを光榮とし喜び勇んで之に應じた。しかるにこの時パリに有名なアナキストの爆彈事件が起つて、何の關係をも有しない彼にまで波紋を及ぼし、地理學講座は禁止の運命に接した。

パリの爆彈事件というのは、ヴァイヤン (Vaillant) という一青年が議會の反動性を怒つて開議中の議事堂に爆彈を投じた事件で、當時フランスの無政府主義運動の一中心人物たりし技師ポール・ルクリュがエリゼの甥であり、それが事件に關係ありと認められたので、自然にエリゼにまで累を及ぼしたのである。ポール・ルクリュの父でエリゼの兄たるエリイも一兩日間拘禁され、ポールは國外に脱走して、缺席裁判で二十年の懲役に處せられたのである。こうした關係にある

エリゼ・ルクリュがブリュッセル市の大學の教授であることは同市のブルジョアの素より喜ばないところであつた。そしてエリゼの地理學講座が禁止されたのみでなく、これに同情を持つていた社會學の巨匠ド・グレフ博士やその友人までも同大學から除名された。自由大學の名に背いて保守的權力が學府を支配するに至つたのである。

ここに當時の佛國におけるアナキスト運動の狀況を序述して、右の如き事件の勃發するに至つた成行きを検討しよう。それには一八九〇年の最初のメーデーから略述する必要がある。私はここにジャック・プロロ (Jacques Prolo) の『アナキスト達』(Les Anarchistes) から大體の記事を摘録する。

x x x

△最初のメーデー 一八九〇年の五月一日の日は、巴里においても、地方の大部分の産業都市に於ても、可成り平穩であつた。只ヴィエンヌに於ては、示威運動が明らかに無政府主義的性質を帯び、數時間は眞の暴動の態度をとつた。このイゼール縣では、織物に従事する労働者が執拗な産業的不況に遭遇して苦しんでいた。それだけ、そこには無政府主義の宣傳が常に間斷なく行われていた。

四月二十九日に、そこで、タヌヴァン (Tennevin) とルイズ・ミッシェル (Louise Michel) の講演會が催された。五月一日には三つの工場を除く他は全部休業が行われた。ミーチングが開催され、そこに出張した市長デヨフレエイと警察署長は毆打されて追い出された。労働者達は隊を組んで赤旗、黒旗を先頭に立てて進行を始めた。憲兵達は抜劍して民衆を解散せしめようとした。しかし民衆はこれに抵抗して、防柵の如く行く手を遮ぎっている貨物自動車を顛覆して、喊聲を擧げながら二隊に分れ、休業していい工場の仕事を中止さすべく突貫した。やがて、群衆はプロカアルという敷布工場を襲つて、「敷布の分配」を行つた。午後になると軍隊が出動して暴動者の群を追ひ散らし、多くの男女を捕縛した。この時ビエール・マルタン (Pierre Martin) も捕えられた。

五月八日にグルノオブルの重罪裁判所でこの事件の公判が開かれた。起訴されたものはタヌヴァン(四八歳)ビエール・マルタン(三三歳)ブイソン (Buisson)(二七歳)等十八名の男女であつた。タヌヴァンを除く他は皆ヴィエンヌの織物職工或は糸梳人であつた。(ルイズ・ミッシェルもタヌヴァンと共に捕えられたのであつたが、ある毒物混合酒を飲ませられて、意識不明瞭な状態にされ、その状態のまま訊問されたので、精神異状者として放免された。しかしこの放免は、ル

イズを庇うためのものではなく、これに依つてルイズを徹底的に社會から、同志の間から信用を失わしめて、葬り去ろうとする官權の惡らつ極まりない手段の一つであつた。

公判廷の辯論はかなり活氣を呈した。傍聽席には、ユリアージュに滞在していて、前夜牢獄にビエール・マルタンを訪ねたエリゼ・ルクリュの姿も見えた。

タヌヴァンは訊問された時、無政府主義の理論を述べた。その時裁判長が「暴動が起つた時、君はヴィエンヌに居らなかつたが、君の熱辯があゝの暴動を惹起せしめたのだ」と言つたので、彼は「若し私がそういう感化力を持つたとすれば、古い社會というものはとおの昔に滅びてしまつたでしょう」と答えた。彼は頗る雄辯であつた。

一時間に亘る評議の結果、再び裁判廷に現われた陪審員に對して三十三の質問が發せられた。しかしマルタンは只次のように言つただけだつた。「私は陪審員諸君の良心が私の良心の如く平靜であることを祈る」。次いで判決が言い渡された。

タヌヴァンは二年の懲役と五年の國外追放、マルタンは五年の懲役と十年の國外追放、ブイッソン是一年の懲役と五年の國外追放であつた。しかるに手續に不備の點があつたので、破毀院(佛國の最高法院)はマルタンを陪審員の再評議も待たず他の裁判廷に廻わした。そこで一八九〇年

十二月八日にビエール・マルタンはガブの重罪裁判所に現われた。そこでは彼は三年の懲役に減刑された。

x

x

x

△第二回のメーデー 一八九一年にはルヴロア・ペレのメーデーが革命的、無政府主義的態度をとつた。ここでは無政府主義者達が赤旗、黒旗を押し立てて街頭に示威行列を行い、電信柱にまで赤、黒の旗を懸えさせた。忽ち警官隊との衝突が起つた。警官隊は無政府主義者達から旗を奪い取ろうとした。同志の人々は警官隊に向つて發砲した。ある者は負傷して倒れ、ある者は退却した。乗馬の憲兵隊が全速力で應援に來た。戦いは續けられた。そして結果は官權側の勝利に歸した。巡查五名と、警部ギルヘムが輕傷を負い、無政府主義者三名が重傷を負つた。その中の一人ドカン(Decamps)はサアベルで六箇所も突かれた。最初はどの新聞紙も無政府主義者の負傷については何も書かなかつた。五月四日の『十九世紀』は「無政府主義者達は警官のために酷い目に遇つたので未だ訊問されない」と書いた。五月二日に、旗を持つていたという理由でショオヴオ(Chauveau)夫人が捕えられた。

この事件は八月になつて始めて世間に擴まつた。何故ならセエヌの重罪裁判廷にその時出廷し

たのは、鍛冶工のドカン(三二歳)金物彫刻師ダルダル(Dardare)(二四歳)クリシイの騷擾の發頭人たる機械組立人レヴェイエ(Léveillé)(三五歳)であつたが、無政府主義者達が捕縛後に連れて行かれた警察署で、眞の蠻行が警官側の手で行われたことが辯論によつて分つた。五月九日に留置場に收容されている彼等を見舞つた醫者は、ドカンの頭も體も打撲傷で一杯であつたと證言した。豫審判事も五月二日に無政府主義者達の訊問を始める前に、まず彼等の傷の手當をさせたことを認めなければならなかつた。また彼等は飲み水をさえ與えられなかつたのだ!

檢事補ビュロオ(Bulo)は、非常に峻烈な論告をした。そしてブルッセルに於いて開催された最近の國際社會主義者大會の決定を楯にとつて、彼は無政府主義者に對して社會主義者と自稱する權利を拒絶した。辯護士ラガス氏とアラン氏がこれに答えた。ラガス氏は猛烈に警察當局を攻撃した。次いでドカンが辯明のために書いて置いた記録を読み始めた。それには無政府主義の理論の説明も含まれていた。

陪審員は、ドカンとダルダルに對して情狀酌量した上で輕減した有罪判決を、レヴェイエに對しては無罪の判決をもたらしした。ドカンは五年の懲役、ダルダルは三年の懲役に處せられ、レヴェイエは放免されることになつた。

そこで『叛逆^{レボルト}紙は、「檢察官は三人の首を要求して、八年の懲役を勝ち得た。それだけ警察が咎められたのだ」と書いた。

ダルダル、ドカン、レヴェイエの判決は無政府主義者の仲間憎惡と激怒と激動とを爆發せしめた。

△ア・ナ・キ・ス・トの復讐 一八九二年の二月十四日から十五日にかけての夜半、ソアジイ・スウ・エテイオルの建物に飛んだダイナマイトは、より重大な諸事變の發端となつた。三月十一日には一八九一年八月に行われたルヴァロア五月一日事件の公判の裁判長であつたブノア氏の住んでいたサンデエルマン街の家が第一に爆發した。三月十五日には、ロボオの兵營のある窓の上で一個の爆彈が発見された。そして三月二十七日には、ルヴァロア事件の時、檢察官であつたビュロ氏の住んでいたクリシイ町の二階がダイナマイトで爆發された。

度重なるこれ等の陰謀は、巴里人達を不安がらせ、恐怖せしめた。しかし彼等はぶつぶつ不平を言い乍らも穩にしていた。警察は全力を盡して犯人を捕えようとした。しかし犯人たるラヴァシヨル(Ravachol)が捕えられたのは全く偶然で、それはあるレストランのボーイ、レロの告訴か

らであつた。ラヴァシヨルは「友達たるドカン、レヴェイエ、ダルダアルが受けた憎むべき暴戻に對して復讐するために」サン・デエルマン街と、クリシイ町に爆弾を投じたことを自白した。料理店の爆破、レロが働らいていたレストラン・ヴェリイは、ラヴァシヨルの捕縛後、非常に繁昌した。警察がうまく廣告してくれたのだ。彌次馬連は聖地巡禮のようにして、この悍猛なアナリストがその前に腰かけた卓を見に来た。レロは僅かばかりのチップを喜んで、捕縛の模様を話していた。「あの男はどうもカトリック教徒のように見えなかつたんです。それで私はあの男だということが分つたんです。だからあの男が店を出て行くと、直ぐ警察に届けに馳けつけたんですよ」。ラヴァシヨルが重罪裁判廷に現われる日の前日即ち四月二十六日まで、そのまま無事な日が過ぎた。處が、この日、俄然一個の爆弾がレストラン・ヴェリイに投じられて、主人を殺し、一人の客に重傷を負わせた。世間の恐怖は言語に絶した。

翌日、ラヴァシヨルが陪審員達の前に現われた時、人々の頭上に非常な強迫的な氣分がみなぎっているのが感じられた。司法省は軍隊に依つて守られ、裁判所は警官で充滿し、陪審員や判事達に充てられた部屋々々の間には多數の憲兵が配置されていた。そして被告の瘦せた横向の姿を浮き上らせている腰掛けも、軍隊や警察力を使つた大がかりな有様や、ラヴァシヨルの意氣揚々

とした、時に耶嚮的な態度や、檢事クネエ・ド・ボオルペルの油汗の玉をつらねた顔も、論告の時の彼のメロドラマ的の聲も、相手を口笛で否定する様子も、みんなこの公判に大悲劇の感じを興えるものばかりだつた。檢察官の努力にも拘らず陪審員はラヴァシヨルに對して減刑することを決定した。これは恐怖のせい、或はラヴァシヨルの短い答辯や、陪審員達の決定を迫つた處の辯護士ラガス氏の特に感動的な辯論のために惹き起された同情のせい、それは今日もお、何んとも言いかねる。しかしラヴァシヨルはそれから數ヶ月後に、モンブリゾンの重罪裁判所で、ある行者を殺したという理由で死刑に處せられ、この町で執行された。

ラヴァシヨルを如何に考うべきか？ 彼は乞食坊主を殺した。寶石を奪うために墓地を發掘した。貨幣を偽造した。精確に言えば彼自身が政府に代つたのだ。彼は眞正の證明つきの五法の銀貨を偽造して使用した。そして最後に數個の家に爆弾を投じた。彼の出生は明らかでない。少年期には非常に宗教的であつたが、彼はそれと同じ熱情、同じ感激、同じ犠牲の精神を持つて、その新しい平等の理論に到達した。彼は斷平として彼が憎惡している處の社會の框の外に飛び出して、殺し、奪い、同胞のために復讐した。そして訊問に對して彼は答えた。乞食坊主は餘計な寄生物だ。だからそれを除くのだ。子供達が飢え、母親達が泣き、男達が貧困に悩んでいる

時、寶石を墓に埋めるものではない。國家さえ貨幣を鑄造する。俺も國家のように同じ質のものを造るんだ！ 爆弾は、強者やその無良心の共犯者やの侮辱的壓迫を受けた自分や他の人々のために復讐する弱者の武器だ、と。ロムプロゾオは彼を「生れ乍らの罪人」の部類に入れた。

こうした爆弾事件は議會に於ても論議の題目となつた。右翼の議員は社會黨の責任を問うた。社會黨議員、殊にマルクス派の革命社會黨は之に對して辯解すべく、口を極めて無政府主義者を惡罵した。之を憤激して議會に復讐したのがヴァイアンの投彈なのである。その爆弾は強烈なものではなくて、一代議士と少數の傍聴者に輕傷を負わしたに過ぎなかつた。死刑の宣告があつた時、負傷した議員を始め數人の代議士は特赦の恩典を大統領カルノ (Carnot) に提議したが、カルノは耳を貸さなかつた。一八九四年二月五日、死刑執行に際し、慣習に従つて一杯の酒を供せられたがヴァイアンは之を拒否して、「私は殺人犯ではないから、元氣つける爲めの酒などを飲む必要はない」と言い、絞首臺に對して、「ブルジョア社會に死滅！ 無政府主義萬歳！」を叫んで悠々と刑死した。年三十二歳。この死刑から數日を経てホテル・テルミニウスに爆彈が投ぜられた。オーケストラの音楽が演奏されている最中であつた。大亂闘の後に逮捕されたのはエミール・アンリ (Emile Henry) というインテリ青年であつた。彼は熱烈な宣言を法廷に朗讀して、

死刑の宣告を受け、その執行に際しても極めて平靜に斷頭臺に登つて『無政府主義萬歳！』を叫んでギロチンにかかつた。この事件と同時に總檢舉、總捕縛が行われ、殆んど三千の家族が崩潰に歸せしめられた。

一八九四年六月二十五日、大統領カルノは博覽會開會式に臨むべくリオン市に行つたが、同夜九時頃、大劇場に入つた時、横腹に匕首の一撃を受けて三時間の後に死去した。下手人はイタリイのアナキスト、カゼリオ (Caserio) であつた。それはヴァイアンの死刑に對する復讐であつたのだ。

以上の極めて省略せる記事によつて、當時の情勢はほぼこれを察することができであろう。エリゼ・ルクリュは全然關知しない事件ではあるが、その餘波を受けて大學の講座を棄てざるを得なかつた。しかし彼の學風を熱慕する學生達の爲に、彼はどこかで講座を開かずにはいられない形勢になつた。當時の事情を、ド・グレフ (エリゼ・ルクリュと共に大學を逐われた社會學者) は言つてゐる。「若しベルギイに於ける自由大學が、曾て一八七二年に全世界の科學者達が保護したこのコムニオン加擔者たる碩學を學問から排除し、そしてあの崇高なる庇護者達が當時明敏にも豫期したところの約束を實現しなかつたという印象を残して、科學の名譽を傷けなかつたな

らば、吾々はこの悲しむべき事件を寧ろただ祝賀する外なかつたであらう。たしかにこの事件は吾々に何の苦惱も何の怨恨も残さないのである。」「ブリュッセルの慈善會館は、吾々の新大學の創立を待つ間、講義室を提供してくれた。一八九四年三月二日、夥だしい群衆の中で、エリゼ・ルクリュが比較地理學の講座を開始したのは、此の會場に於てであつた。そして彼は最初からベルギー公衆の眞實純誠なる同情を博し、同一會場に於て環境に關する講演を繼續した。それと同時に彼は、ブリュッセル市及び諸地方に無政府主義に關する講演をも續行した。一八九四年に決定的に創立せられた新大學のアカデミックの一年間を規則的に講義し續けている間に、ロンドンの王室地理學會は、前述の如き事件（大學講座の禁壓）の對照を顯著ならしむべく、金牌を彼に贈つた。エリゼはそれを普通の謙遜さを以て受け取り、深き感謝を表示した。ただしかし、その金牌は彼とともにブリュッセルには來なかつた。蓋しロンドンに、慰問すべき多くの貧乏があり、支援すべき多くの勇者が居つたのだ。あらゆる觀點から、その金牌は莫大な價值であつた。それを贈與した名譽は協會に屬し、それを受け、それを自由解放のための貨幣に替えた名譽はエリゼに歸する。」

一八九六年より一九〇〇年まで、エリゼは新大學に於ける講座を續け、イラン、ツラン、及びメソポタミイに就き、またセム人に就き、エヂプト及びエヂプト人に就いて、講義しつつ、なお他方に於て、シャルロアの科學殿に於て、ブルッセルの人民會館に於て、ロンドンの地理學會に於て、アンヴェルスの地學協會に於て、それぞれ立派な講演をしていた。一八九八年、アンヴェルス地學協會に於ける『極東』に關する講演は眞に豫言者的であつたと言われる。一八九六年には『進化、革命、及び無政府的理想』が出版された。これに就ては彼の思想を検討する際に紹介するが故に、ここには之を省略する。